

式 辞

新入生の皆さん、静岡県立大学、静岡県立大学短期大学部、静岡県立大学大学院へようこそいらっしゃいました。ご入学おめでとうございます。ご同席のご家族、保護者の皆様には、これまでお育て下さったことに、心からご苦労様でしたと申し上げます。私にも経験がありますが、本当にホッとされていることと思います。ご来賓の皆様におかれましては、年度始めのお忙しい時期に、新入生を祝う晴れやかな式にさらに華を添えて下さったことに、あつく感謝申し上げます。

今日の入学式は私にとって、記憶に残るものとなるでしょう。なぜなら、わたしはこの4月から、みなさんと一緒に、静岡県立大学に学長として「入学」したからです。35年間、私立大学で教壇に立ってきましたが、縁あって県立大学にお招きいただくことになりました。生まれ故郷の静岡県において、未来を支える若い人々を育てるお手伝いができる喜びにあふれています。立場は異なりますが、みなさんと一緒の同窓生として、私自身も育っていきたく願っています。

学生諸君。みなさんはいままでの受験勉強から解放されてほっとしていることでしょう。しかし入学は最終ゴールではない。スタート地点に立ったというにすぎません。

これからサークル活動や部活に励もう、遊びたいからアルバイトに精をだそうと意気込んでいる諸君もいるかもしれない。青春を謳歌するのは大変いいことだ。友達を作り、いろいろな社会体験をすることは、その後の人生にとっておおいに役立つからです。

大学で過ごす期間は「モラトリアム」の期間だといわれます。本来は、大人になるための準備期間のことで、一人前になることを猶予されていることを意味しています。しかし現実にはしばしば、社会に出ることを遅らせて、無責任に甘えられる状態を指すようになっているようです。

大学に在学する期間は、これからの人生をどう生きるか、何を身につけ、社会に対して何をなし得るのか、それをみきわめる時間です。そのために必要な資質や能力を蓄えることが求められています。試行錯誤の時期と言ってよいでしょう。

木苗前学長は「個を拓(みが)き、強い絆で、知を発信」を本学のモットーとしました。すばらしいことばです。大学人、すなわち大学に学ぶ者も、大学で研究・教育に携わる教職員も、一体になって、知識を深め、社会に対して貢献しましょ

う、ということです。

社会に対する貢献とはなんでしょうか。知識、技能を習得し、あるいは資格を獲得して、卒業後に就職したり会社を興すなどしたりすることは、だれにとっても自分の生活のために必要なことであり、それ自体が、大きな社会貢献です。

しかしその上に、もうひとつ付け加えていただきたいのです。それは、社会への積極的な働きかけです。私はそれを「地域をつくる、未来をつくる」ということばにしました。自分のためだけではなく、地域社会、日本社会、世界のために、そして未来の社会に対して、自分が何をできるかを考えてほしいと思っています。

昨年、ノーベル平和賞はアジアの 2 人に与えられました。インドでこどもの権利のために活動しているカイラシュ・サティアーアーティさん、とパキスタン出身のマララ・ユスフザイさんです。とくにマララさんの受賞は世界に大きな反響を巻き起こしました。わずかに 17 歳の生徒だったからです。イスラム過激派の銃弾をうけながらも、女性差別をなくすことを訴え、女子教育の必要を唱えたマララさんの行動力、しっかりした考え方に、感動しました。

皆さんには命をかけても主義・主張を貫けとはいえません。しかしマララさんの受賞は、10 代の生徒でも一人前の人として、あるいは平均以上の立派な行動できるのだという、強いメッセージを放っています。

今、日本では 18 歳で選挙権をえることが話題になっていることをご存知でしょうか。世界のほとんどの国が 18 歳で選挙権を与えられています。日本の大学生は、まるで子供扱いされている、ということなのです。それがいま、変わろうとしています。

今国会で「公職選挙法改正案」が可決される見通しです。そうすると、満 18 歳以上の国民が選挙権を行使できることになります。高校 3 年生のうちから投票できるということです。ここにいるみんなが、都道府県／市町村の議員、首長、国会議員委員を選ぶことができることになるのです。

選挙権をもつということは、一人前の判断ができるおとなとして認められている、ということです。勉強中の身であり、独り立ちしていないとはいってられない。みなさんは将来の地域を背負って立つ未来の主人公です。地域をみつめ、未来を見据えて、自分がなにをしたいのか、またなにができるのかよくかんがえてほしい。

私は、「未来は自ら創るもの」ということをモットーとしています。それはアラン・ケイという計算機科学者の、「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」ということばからヒントをえました。また別の、フランスの哲学者シャルティエ、筆名をアランといますが、『幸福論』というエッセーの中で、「悲観は気分属し、楽観は意志に属する」といっています。どちらも未来に対

して受け身でなく、積極的に立ち向かうこと、将来がどうなるかではなく、どうしたいかが大事だということを言っているのです。

日本では 2008 年をピークにして人口減少が始まりました。少子・高齢化の結果です。このまま人口減少が続くと、21 世紀末には、人口が 3 分の 1 まで減ってしまうと推計されています。そのため法律で、全国の都道府県、市町村がそれぞれ総合戦略をたてることを規定しています。

静岡県でも人口減少が起きていて、とくに若者の県外への流出がおおきな問題になっています。3 月には「静岡県まち・ひと・しごと県民会議」が開催されました。私にとって嬉しかったのは、市長、町長さん、経営者団体の代表など、多くは年配のそうそうたる方々に加えて、このメンバーに学生が 2 人選ばれて参加していることでした。

みなさん、50 年後のことを考えてください。18 歳の新生は 68 歳。現在の私の年齢です。私はもういませんが、みなさんは 50 年後の社会の頼りになる存在であるはずで。未来の社会を創るのは、未来の主人公である皆さんです。

あらためてお願いします。21 世紀の課題は、日本の人口減少だけではありません。世界に目を向ければ、地球温暖化による気象災害の多発、人口増加と経済成長による食料、水、エネルギー資源の不足、貧困の拡大、宗教や文化の違いによる民族対立など、内外の課題は山ほどあります。

皆さんにとって、薬学、食品栄養科学、看護、歯科衛生学、社会福祉学、国際関係学、経営情報学など、それぞれの専門領域の学業に勤めて、本来の目的を達成することが第一の目標です。それにくわえて、よりよい暮らしを実現するために、地域社会に関わりをもって、若い力を発揮してもらいたいのです。

間もなく創立 30 周年を迎える本学も、昨年度から、文部科学省から資金をえて「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（略称「地（知）の拠点」COC 事業）、すなわち地域、産業界と連携して社会貢献する研究・教育プログラムに取り組んでいます。学生諸君にもいろいろなかたちで参加してもらっています。皆さんの参加を大いに歓迎します。

本大学のシンボルマークを見てください。富士山とはばたく若鳥の翼をイメージしたデザインです。学内にも、はばたきの像や、はばたき橋、はばたき寄金、はばたき賞など、「はばたき」を関した言葉にあふれています。「はばたき」こそ、みなさんの第一目標です。大学生活を通じて、知識を深め、高い能力を養い、視野を広げて、地域へ、日本へ、そして世界に向かって、雄々しく羽ばたいて、みなさんが巣立つ日を楽しみにしています。この入学式を、大人の世界への第一歩

平成 27 年度 入学式

として、地域をつくる、未来をつくる第一歩として歩み出す出発式として、お祝いしたいと思います。

静岡県立大学
静岡県立大学短期大学部
学長 鬼頭 宏